

J・ウェスレーの教育論：人間理解の視点から

野村 誠

18世紀英国メソジズム運動が成功した原因の一つを、ウェスレーの抱いていた人間理解に焦点をあて、彼の教育論を考察したい。宗教指導者は、彼の信徒に生涯教育として多大な影響を与え続ける。何よりもウェスレーの説教自体が大衆教育であった。たとえば「金銭の使用法」「悪口の治療」「良き家令」「最後の審判」などが上げられる。またウェスレーは多数の手紙をとうして、牧会者であるばかりか、良き生涯教育者でもあった。宗教的指導者の抱いていた人間理解、その宗派の信徒教育の源泉である。

しかし、ウェスレーの教育論は、従来、キングスウッドに代表される慈善学校(Charity School)、日曜学校(Sunday School)などについてはすでに言及されている。そこで今回はそれらを扱わず、教育者としてのウェスレーを二つの分野に限定して考察する。Part 1「ウェスレーの人間理解」を考察し、Part 2「信徒説教者への教育と成長」として、女性伝道者も含め、信徒伝道者にたいする教育を見てみたい。

Part1 ウェスレーの人間理解

A. 救済の根拠と「先行の恩恵」

メソジズム運動が宗教復興運動として奇跡的に大成功した要因の一つに、ウェスレーの抱いていた人間理解がある。宗教的指導者の持つ人間観は、その宗派の会員に影響を与えることが多い。社会的弱者のうちに可能性を見出し教育

し啓蒙し活躍の場を与えるか、あるいは社会的弱者に対して宗教的にも救われ得ない人々と差別するか、この相違はたいへん大きい。かくしてウェスレーは、カルヴァンの救済の二重予定説に反対した。カルヴァンの二重予定説では、神は世界を創造する以前に、ある人々を救いに、ある人々を滅びに定めたというものである。救いに選ばれた人々は、人生の途上で必ず救済され神の栄光を現すために用いられるというのである（カルヴァン『キリスト教綱要』3：22）。救いに選ばれた人々は、彼らの信仰、善行などの功績によるのではなく、すべて神の自由な「恩恵と愛」によるのである。すべて神の永遠の昔に決定された意志、予定に基づくのである。それゆえ、神の予定の前では、人間の自由や意志など無に等しい。

ウェスレーは全ての人々は救済に招かれていると教え、誰でも信じる者は救われることを唱えた。そして一人一人の会員に可能性を見出し、教育して活躍の機会を与えていったのである。ウェスレーとメソジズム運動に見出される人間理解は人間の本質、意志、理性に対する信頼であり楽観視である。この見解は、カルヴィニズムの二重予定説、すなわち、神は救われる者と滅びる者を前もって定めているという教理といちじるしく相違している。

そこで、まず「先行の恩恵」に基づく人間理解を見てみたい。人間は、「先行の恩恵」によってある程度の自由意志を与えられており、キリストの福音に応答し救いを受け入れる力が与えられているというのである。ウェスレーは、人は原罪に支配されているが、なお神から恵みを受け、カルヴァンと異なり自由意志を与えられていると捉えている。（『ウェスレー著作集』6：134 頁 以下『著作集』と略記）。

では、次に、「先行の恩恵」と「二重予定説について考えたい。まず「二重予定説」による救済の根拠について、考察してみたい。ウェスレーの理解するカルヴァンの二重予定説の根拠とは次のようである。それは世の創造の先の、神の選びと救いの契約に基づくものである。

私は、とても理解できないもう一つの契約を聞いた。私の聞いたところでは、「父なる神は、世が始まる前に、ご自分のみ子と契約を結ばれた。その契約によると、み子はこれこれの事柄で苦しむことに同意され、また、父なる

神は償いとして、み子にこれこれの魂を与えることに同意された。その結果、これらの魂が、これらの魂だけが救われねばならないのであり、従って、他のすべての魂はのろわれなければならない（『著作集』7：145）。

ウェスレーは、二重予定説を、世界創造に先立ち、父なる神と御子との救いの契約（*pactum salutis*）に基づくと理解している。カルヴァンの二重予定説の箇所は、『キリスト教綱要』の3：22：1、3：22：2、3：22：6、3：24：5などに基づいている。ウェスレーも、「先行の恩恵」の基を、「先在のキリスト」に置く。次の詩は、ジョン・ウェスレーによる「主の祈りによる讃美」の7番である。

世の創設の先に居られ給いし

永遠の・汚れなき神の小羊。

我らの上に、汝の血を振りかけ

清め永遠に清く保って下さい。

すべての魂のために（汝にすべての栄光を帰するため）

我らの心からの同情を動かして下さい。

このことにより全人類が見るでしょう。

神が我らの中にいまし、神が愛であることを。（*Works* 5：343）

明らかに、これこそ「先在のキリスト」の概念が見出される。さらにウェスレーは、説教「不正の秘密」の中で「先在のキリスト」について次のように語る。

正しさのこの偉大な秘密は、まきに始めの約束の時から肯き始めた。従って、小羊は、神の目的のうちに、「世の初めから屠られた」のであり、同時に聖霊の潔めは、人々の魂を更新し始めた。我々は、この例をアベルのうちに見ていることは否定できない。そして彼は、神より「義なる者と認められた」（ヘブル 11：4）のである。そして、その時より、同じ信仰に与かるものは、同じ救いに与かる者であり、ただ祝福のうちに初めの状態に戻されるばかりでなく、神の像もまた回復されるのである。（*Works* 6：263）

世の創造の先に屠られ給うた小羊と共に、聖霊も「すべての魂」を清めるために働き始めた、ウェスレーは、すべての人を清め、救うことを神は意図されていると主張している。かくしてカルヴァンの二重予定説との相違が、「先在のキリスト」の理解の相違から存在しているのである。

B. 「先行の恩恵」と良心

「先行の恩恵」の教理は、神の霊が、罪人である人間に与えられており、人は良心を持ち、救いへの選択を自由になし得るという思想である。ウェスレーの「先行の恩恵」の教理は、いわゆる自然神学ではない。すべての人が墮落したまま放置されているというのではなく、キリストの贖いによって神の側からある程度、神と人間との断絶を回復され、良心に基づく律法が与えられているというのである（『著作集』4：314-315）。ウェスレーは、次のように述べる。

われわれが受け入れられているという立証をもつ前にも、[ある軽度の]寛容・慈悲・柔和・自制が存在し得るであろう。（これは幻影ではなく、真にその程度存在するのである。それは神の先行の恩恵によって可能である）。（『著作集』5：217）

人間は、神の救いに気づく以前に、先行の恩恵が与えられており、その働きを受けていると考えている。そして、救済は先行の恩恵に基づき、「それは神を喜ばせようとする最初の望み、神の意図に関する最初の光の現われ、……、神に対して罪を犯したというつかの間の罪の意識を持つことである」（*Works* 6：509）とウェスレーは定めている。「先行の恩恵」は、人間の良心の働きと関連している。

一般にいわれる自然の良心（*natural conscience*）を全く欠いたまま生きている人はない。というよりむしろ、これこそ先行の恩恵（*preventing grace*）というべきものである。人はみな、多少とも求めない先から、この恩恵を与えられている。（*Works* 6：512）

「先行の恩恵」であるキリストの恵みは、すべての人に分けへだてなく与えられる。ウェスレーは「我々の救いの根源である神の恵みと愛は、全ての人に自由・無料」であり、「人のどのような力にも功績にもよらない」(*Works* 7:373)と主張する。人は、誰でも良心が与えられており、この良心に反する行為に対しては不安を懐くのである。従って「人が罪を犯すのは、恩恵を持たないためではなく、むしろこの恩恵を正しく用いないためである」(*Works* 6:512) ウェスレーは述べる。

このように「先行の恩恵」と良心に関連があり、良心は、人の行動が神の言葉から逸脱していないかどうか判断し、逸脱している時、良心の苛責を感じ、自己批判をする (*Works* 7:191) のである。そして「真の良心の存在と存続のために、神の霊の継続した影響は、絶対に必要である」(*Works* 7:190) と彼は述べる。

Rupert Davies は、「ウェスレーは、新約で語られているように、またそれがだれにでも存在しているように、良心は神の賜物であり、『我々の聖霊の証』であり、かつ、神に由来していると確信していた」¹と主張する。ウェスレーにおいて、「先行の恩恵」と良心は同一視されていた。そして、聖霊の助けにより、人は良心によって自己自身を知るのである (『著作集』3:289-290)。

ウェスレーは、人間の倫理性と選択の自由を回復する聖霊の「先行の恩恵」が、すべての人に生来的に与えられており、このことを「良心」と呼んでいる。この「先行の恩恵」としての聖霊の働きにより、人は神の像を回復し、魂の中の神の命を見つけ、福音に対して応答することができ神の救いにあずかることができるのである。この「先行の恩恵」が「先在のキリスト」に基づき、その救いの完成も十字架のキリストに基づくことから、救済のすべてがキリストに基礎づけられていることが明らかである (*Works* 8:278)。

¹ Rupert Davies, "People Called Methodists" in *A History of the Methodist Church in Great Britain*, 3 vols. (London: Epworth, 1965), 1: 156.

C. 人間論

ウェスレーは全ての人々は救済に招かれていると教え、誰でも信じる者は救われることを唱えた。そして一人一人の会員に可能性を見出し、教育して活躍の機会を与えていった。ウェスレーに見出される人間理解は人間の本質、意志、理性に対する信頼であり楽観視である。この見解は、カルヴィニズムの二重予定説、すなわち、神は救われる者と滅びる者を前もって定めているという教理といちじるしく相違している。

そこでウェスレー神学思想の人間論をここで取り上げてみよう。人間は神に似せて造られたという「神の似像」の概念に着目したい（『著作集』5：51）。

「神の似像」(Imago Dei)

キリスト教の人間論の基本は、「神の似像」の教義から出発している。ではウェスレーは「神の似像」の教義をどうとらえているだろうか。ウェスレーは、神の似像 (Imago Dei) を次の三点についてしていたと信じていた。

(1) 神の自然像 (natural image)

人は「理解力や意志の自由やいろいろな感情を与えられている霊的存在」であり、「神ご自身の不死の映像」を与えられていた。

(2) 神の政治的な像 (political image)

人に自然的世界を支配すべく与えられた力である。

(3) 神の道徳的な像 (moral image)

アダムは、神に似せて、愛と正義と聖潔、憐みと真理に満ちた人であるように造られていた。ところが、アダムの原罪後、人間における神の似像を損ない、特に道徳的な像を破壊したため (*Works* 6：223) 自然約な像も政治的な像もゆがめられた。すなわち、原罪を負ったのである。アダムの墮罪により、神の似像の、特に道徳的な像を破壊されたため、自然的な像も政治的な像もゆがめられたとウェスレーは主張している。

ウェスレーは、人は原罪に支配され、腐敗しており、悪に傾く傾向の上に立っていると語り、ウェスレーの原罪の理解は、アウグスティヌスやカルヴァンと同じように、アダムの墮罪の結果すべての人は、原罪を負い、罪人であるという教理である。

人は地上で、肉体や精神の衰弱や欠陥から失敗を完全には避けることはできないし、そのような失敗なしの「完全」をウェスレーは目ざしてもいない。つまり過失の罪を罪として見なしていない。しかし「先行の恩恵」によって、人は救いを選ぶ力が与えられていると言うのである。ウェスレーは、人間は原罪によって神の似像を破壊されたが、神の恵みとしての「先行の恩恵」により、ある程度の自由意志と理性、洞察力を与えられていると述べている (*Works* 10 : 229-30)。ウェスレー神学では神からの恵みにより、神の似像は完全に破壊されているとは見なされていないと L. O. ヒンソン (Hynson) も主張している²。しかも、ウェスレーは神がすべての人を愛し、良心を賜わり、救済へと招いていると唱えている。

ウェスレーは、救済に全ての人が「先行の恩恵」によって招かれているので、救済は、神の主體的恵みの業となる。「神があなたがたの内で働くかぎり、今やあなたは救いを得ることができる」 (*Works* 6 : 512) と彼は語っている。

人間は、「先行の恩恵」によって良心と理性とある程度の自由意志を所有しているので、神からの呼びかけに応答できるというのである (*Works* 10 : 229-30)。すなわち、善悪に対する人間の責任能力を認めているのであり、ウェスレーは人間を信頼しているのである。良心は、神が創造の中で「先行の恩恵」として人間に与えた重要な恩恵である (*Works* 6 : 512)。

ウェスレー研究家の J. C. ローガン (Logan) も、ウェスレーは道徳的な神の像が完全に人間から破壊されたとは見ていない³と論じている。ウェスレー自身も、神の似像は原罪によって破壊され尽くされてはいないと述べている (*Works* 6 : 318)。この点が、ウェスレーの人間論を特色づけるところでありカルヴァン主義と相違する所である。

ウェスレーは、人間の自由と理性を信じている。そして人間の自由は神から与えられたものであり、理性の結果としても自由を求めると述べている。特に宗教的自由は、我々の良心に基づき、自由に宗教を選択する最も重要な権利と

² L.O. Hynson, "Implications of Wesley's Ethical Method and Political Thought" in ed. by Theodore Runnyon, *Wesley's Theology Today* (Nashville: Kingswood, 1985), p. 383.

³ J.C. Logan, "Toward A Wesleyan Social Ethics" in *Wesley's Theology Today*, ed. by Theodore Runnyon (Nashville: Kingswood, 1985), p. 365.

唱えている (*Works* 11: 37)。良心は、自由と理性の下で機能し、自由のないところでは働かないのである (*Works* 11: 90–93)。人間の自由と理性、そして良心の働きを主張していることは、プロテスタント神学の中でも、ウェスレーの特徴である。

ウェスレーの生きた時代の潮流に着目してみよう。W. J. ウォーナーは「個人の経済的自由が、市民の自由の根源であった」⁴と述べ、「経済的自由主義は、政治的自由の力であった」⁵、ウォーナーは18世紀イギリスの思潮では自由を尊重する土壌があり、個人の経済的自由な活動の尊重の思想は、市民的自由の根源であったと述べている。そして新しい経済自由は、経済的機会(チャンス)の平等の原理であった。その中で個人の能力の自由な遂行が個人と社会にとって十分な利益をもたらすと信じられていた。

さらに、この自由は宗教的な自由にも結びついており、非国教徒の宗教運動と結びついていた。英国には自由を尊重する土壌があったと論じている⁶。ウェスレーは自由を強調し、自由な中での愛や救いへの選択、意志を唱えた。そして、自由な中での決断、選択は、道徳的責任を個人が問われるのである。ウェスレーは、次のように自由について語っている。

自由は心のすべての機能の上に働きかけることができるだけでなく、身体の運動についても同様である。自由とは自己を規定することのできる力である。(*Works* 7 : 228)

ウェスレーは、自由は心の固有な働きであり「自己を規定することのできる力である」と理解している。このことは、教育的にも重要な意味がある。社会から排斥された人が、しがらみから解放され自由に自己を描くことができることは救いであった。つまり、社会は、その人の所属する階層、職業、住居、服装などから、人間を規定しようとし、振舞い行動、能力までも、その規定にお

⁴ W. J. Warner, *The Wesleyan Movement in the Industrial Revolution* (New York: Russel & Russell), p. 26.

⁵ *Ibid.*, p. 28.

⁶ *Ibid.*, p. 4.

しこめ、しがらみのうちに閉じ込めようとする。

ところが、ウェスレーによって自由にされた個人は、本来のあるべき自己を想像し、その自己像に向けて、飛翔し、苦境から脱出するエネルギーを得ることが出来るのである。ウェスレーは、会員に自己を自由に描かせて飛躍の目標を与え解放し、エネルギーを出させたのではないだろうか。ウェスレーの主張したこの自由こそ、メソジズムの教育力の源泉となった一方、当時存在していたカルヴィニズムの二重予定説に基づく「決定論的人間論」に対して、ウェスレーは道徳的な主体的人間論を提出した。つまりウェスレーは、人間の自由を唱え、かつ道徳的責任を求めたのである。

ウェスレーは会員にたいして自由に未来を選択させ教育していったのである。

Part2 信徒説教者への教育と成長

A. 信徒説教者

18世紀メソジズムは、貧しい人々が絶え間なくメソジストの仲間に入会し続けていたが、会員の社会的成長は顕著な特色であった。そして会員の成長は、リーダーや説教者にとっても大変な成長を要求した。つまり説教者も、会員の成長にあわせて成長しなくてはならなかった。かくして彼らは、以前より説教に教養と準備を要求されるようになっていった。それまでの単純素朴な信仰、敬虔、情熱、定型句の繰り返しでは聴衆が満足しなくなっていったからである。しかし会員の説教者への知的要求への対応は必ずしも容易なことではなく、一度身についた言葉使い、知性、教養を向上させることは、人によっては困難なこともあっただろう。この説教者と一般信徒の乖離は、急速に発展する宗教組織を崩壊させるような危機に遭遇させる。ウェスレーは、1746年ごろからこのことを心配し始めた。説教者を会員に飽きさせないために巡回させたのもその手段であった。しかし彼は、無学な弟子たちの教育に配慮し、読書を勧めた。説教者は幅広い教養なしに深い説教はできないので、1日5時間の読書をするよう求めた⁷。エルマー・タウンズが指摘するように、ウェスレーは、宗教復

⁷ Warner, op. cit., p. 230.

興の力が、伝道者の教育にかかっていることを認識していたのである⁸。初期メソジストは、教育の機会を奪われていた階層に属しており、文盲や無知故に、社会的経済的な権利を奪われていた。

ウォーナー博士も、初期リーダーたちの教育を「たいへん貧しいもの」(A very meager one)、今日で言えば、初等教育程度と捉えている⁹。かくしてリーダー達への教育はメソジスト教会の死活をかけた課題であった。タウンズは「メソジスト派の人々は貧しいが、だからといって無学であってよいというものではない、と心から信じていたし、またもし信仰復興が教育とつながっておりさえすれば、自分の信仰復興の成果は永久不変のものだ」¹⁰と述べている。メソジスト教会と運動の源泉の一つは、その組織にあるが、ウェスレーは組織を用いてして、説教者、リーダーはもちろん、会員一人一人を注意深く牧会し組織的に教育し成長させていった¹¹。タウンズの言葉を借りれば「まさに教育はメソジスト派の信仰復興に役立つねばならない」¹²と考えていたのであった。ウェスレーは教育のないメソジスト教徒でも容易に読むことが出来るよう配慮した50冊の「キリスト教文庫」(A Christian Library 1749年—1755年)を編集、出版した。この本の内容は、キリスト教の人々の伝記や作品で、教会教父や国教会の人々とともにピューリタンの人々も含まれていたと言われている¹³。本はメソジストの組織を通して安く配布され、人々は読書の喜びを知り、知的に啓蒙されていった。その中でも、説教者やリーダーに対する教育は、重要な課題であり、その難問を十分こなしていったことは明らかである。

ウェスレーはリーダーも含め全会員が、富裕になって聖霊が離れ、宗教的に墮落しないように「できる限り与えよ (give all you can)」(Works 7 : 289—290)

⁸ エルマー・タウンズ編著、三浦正訳『宗教教育の歴史』、慶応通信、昭和60年、266頁

⁹ Warner, op. cit., pp. 251—252.

¹⁰ タウンズ、前掲、266頁

¹¹ A. Raymond George, “John Wesley: The Organizer”, in *John Wesley: Contemporary Perspective*, ed. by J. Stacy (London: Epworth, 1988), pp. 108-14.

¹² タウンズ、前掲、266頁

¹³ 清水光雄著、『ジョン・ウェスレーの宗教思想』、日本基督教団出版局、1992年、33頁

を奨励した。かくしてメソジスト教会と運動は、会員からの献金も増え社会的にも多大な貢献をして認められていった。

B. 女性リーダーたちへの教育

この運動の支持者の多数は、女性であり女性が自由に支配し影響を与え、この運動を発展させていった¹⁴。ウェスレーは、女性の力を教育し開発して、この運動を発展させていった。

禁酒と公衆衛生、家庭の聖潔は、女性の協力を得ずに出来ないことであり、女性の支援があったことは明らかである。18世紀の後半、特に女性はメソジズムの強力な担い手となっていた。18世紀メソジズムの会員の男女比は1対2（Bristolでは1対3）¹⁵で女性が圧倒的に多かった。メソジズムの成長は、女性会員の増加を促し、その中で女性リーダーの役割は重要なものとなっていた。彼女たちは、リーダーとなり、地方説教者として活躍した。メソジズムでの女性の活躍は、女性達の社会への窓口となり、社会で活躍する足場となった¹⁶。18世紀メソジズムの宗教的生命力の一因は、生き生きとした女性の活動にあったと思われる。そこで、女性説教者、リーダー達に着目しよう。

女性リーダーの原型は、メソジズムの母と称されるウェスレー兄弟の母スザンナである。F.A. ノーウッド（Norwood）は、スザンナがエプワースで聖書研究を行ない、説教も担当していたと述べている¹⁷。さらにスザンナ以外にも、当時としては多数の女性リーダーが高位の指導者として活躍していた。そして、女性が指導力を発揮してグループをつくり祈りの会を持ち、説教者を招き組織を拡大していった。ウェスレーの方針もあって、メソジズムは女性を啓発しそ

¹⁴ Paul Wesley Chilebote, 'The Women Pioneers of Early Methodism', in *Wesleyan Theology Today*, ed., T. Rynnnyon, p. 180.

¹⁵ Rosemary S. Keller, Rosemary S. Keller, "Women and the Nature of Ministry in the United Methodist Tradition", *Methodist History*, vol. XXII, No. 2, January, 1984, pp.99-114, p.102.

¹⁶ op cit., p.102

¹⁷ Frederic A. Norwood, *The Story of American Methodism* (Nashville: Abington, 1974), p. 36.

の力を解放、女性の地位向上に多大な貢献をした¹⁸。

初期メソジズムでは女性達が自主的に伝道集会を計画し、人々に呼びかけ、ウェスレーや説教者を集会に招き、class や society を拡大していった。女性たちの自主的活躍が説教者の宿泊や伝道旅行を可能にした。予定していた説教者が突然欠席した場合、女性が説教を担当することもあった。多数の女性が登場し、彼女たちがメソジスト教会の説教を担当し、仕事のリーダーシップを掌握するまでになった¹⁹。例えば、Elizabeth Collet は、1782年(20歳)に Feock に移り住んだ。そこにはメソジスト教会がなかったので家庭を集会所にして説教者を定期的と呼んだ。ところが説教者の娘の突然の死により、来れなくなり、会衆に請われて彼女が説教をしたところ集合は大成功であった。その後、彼女は伝道を行ない生涯に7つの会と7つの礼拝堂を建てた²⁰。1784年以後の時期になるが、さらに、Sarah Mallet は、神からの伝道への霊的召命を受けて説教を始め、サフォークとノーフォークで説教し、女性説教者として正式に任命され、定住説教者ボイスと結婚した。他にも多数の活躍した女性があげられる。(例えば、Ann Cutler: Lancashire と Yorkshire の宗教復興の先駆者 Grace Murray や Nancy Bolton, Hannah Ball, Darcy Maxwell など) メソジズムの信徒は女性が多く18世紀を通して会員の男性と女性の比率は1対2であった²¹。18世紀メソジズムでは、女性が圧倒的に多く、女性が生き生きと活躍していたことが、その活力の源のひとつであった。そして女性が、男性と平等に役割、責任、仕事を与えられ、敬意を表されたことにあるだろう。そして何よりもウェスレーが彼女たちを教育し啓発していったことにある。

ここで女性リーダーに対する偏見差別との戦いについて目をむけてみよう。

¹⁸ J.A. Newton, "Wesley and Women" in *John Wesley—Contemporary Perspective*, ed. by J. Stacey (London: Epworth, 1988), pp. 129-137.

¹⁹ Leslie F. Church, "More About The Early Methodist People"(London: Epworth, 1949), p.137.

²⁰ Leslie F. Church, *op cit.*, p.158.

²¹ Rosemary S. Keller, "Women and the Nature of Ministry in the United Methodist Tradition", *Methodist History*, vol. xxII, No.2, January, 1984. pp. 99-114.

女性のクラス・リーダーや説教者に対する抵抗偏見、差別はあったが、それとどう戦ったかも見ておきたい。まず女性説教者への差別の根拠となった聖書の箇所は、I コリント 14：34-35 であった。

婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることは許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従うものでありなさい。何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会の中で発言するのは、恥すべきことです。

教会の中で女性は慎み深く従順であらねばならないという概念が女性差別の根底にあった。この差別に女性達自身も苦しめられた。

その偏見差別に対して、E. Brown は、ウェスレーと女性リーダー達は、女性説教者の正当性の根拠を次の4つの方法で確立していったと指摘している²²。

①聖書のなかの女性の活躍を探し、聖書を再解釈して克服していった。

②キリスト教史の伝統の中で活躍した女性に根拠を求めた。

③説教などにより理性的に説明し納得させる。

④神からの召命体験と実績を通して女性説教者の正統性の認識を得ていった。

特に「特別の召命」が女性リーダー自身の内的根拠となり、自己の内的葛藤において救いとなっていた。

女性説教者の「人柄、疑い得ない誠実さ、召命感、心血を注いだ牧会の成果」、誰にも否定できない才能と実績を適して、人々が女性説教者を認めていった²³。

いずれにしろ、多数の有能な女性リーゲーターがいたが、その1人にサラ・クロスビー夫人(Mrs. Sarah Crosby)がいる。彼女は、1770年代に巡回説教者になった。彼女は1761年の初めに、組合で27名の会員に会った。彼女の集会には200名の人々が集まることもあり、グループ全体を彼女が指導した。1761年の2月

²² Earl K. Brown, 'Feminist Theology and the Women of Mr. Wesley's Methodism', *A Wesleyan Theology Today - A Bicentennial Theological Consultation*, ed. By Theodore Runyon (Nashville: Kingswood, 1985), pp. 143-46.

²³ Leslie F. Church, *More About The Early Methodist People* (London: Epworth, 1949), pp. 140-41.

14日、ウェスレーは彼女に手紙を出し、メソジズムの内にある女性説教者を認めないという偏見に抗して、彼女に註解書を読み短い話をするよう勧め、彼女を励ましている (*Works* 12:353)。彼女は後に、リーズとダービーにて120の集合を指導し、1年に600の組合や集会を指導した²⁴。クロスビー夫人は個人的カウンセリングに特に秀れ、息の長い実り豊かな牧会を行なった²⁵。

メソジズムの進展につれ、女性会員が増加した。その中で女性リーダーの役割は重要なものとなっていった。メソジズムでは、基本的に女性の地位は、男性と同等で資質があれば、クラス・リーダーとして活躍し、地方説教者として奉仕したとウォーナーは述べる²⁶。しかし女性指導者に対する抵抗、偏見はあった。しかしウェスレーによる女性指導者の登用と彼女たちの活躍は、初期メソジズムの生命力であり活力の大きな原因をなした。女性説教者の活躍は初期メソジズムの顕著な特色のひとつであった。

18世紀メソジズムの内的発展と安定の一つが女性の活躍、そして女性リーダーへの評価、啓発と教育、女性の説教者への登用にあったといっていよう。

まとめ

メソジズム運動が宗教復興運動として奇跡的に大成功した要因の一つに、ウェスレーの抱いていた人間観がある。宗教的指導者の持つ人間観は、その宗派の会員に影響を与えることが多い。社会的弱者のうちに可能性を見出し教育し啓蒙し活躍の場を与えるか、または社会的弱者に対して宗教的にも救われ得ない人々と差別するか、この相違はたいへん大きい。ウェスレーは全ての人々は救済に招かれていると教え、誰でも信じる者は救われることを唱えた。そして一人一人の会員に可能性を見出し、教育して活躍の機会を与えていったのである。ウェスレーとメソジズム運動に見出される人間理解は人間の本質、意志、理性に対する信頼であり楽観視である。もちろんウェスレーは、破門処分も実

²⁴ 山口徳夫訳『J.ウェスレイ手紙集』伝道社、1975年、341頁、註

²⁵ F. A. Norwood, *op cit.*, p. 36.

²⁶ 山口徳夫訳『J.ウェスレイ手紙集』伝道社、1975年、341頁、註

行したが、本質的には、人間の意志、知性、理性への信頼、温かさがあった。またウェスレーは、自由は心の固有な働きであり「自己を規定することのできる力である」と理解した。社会から排斥された人が、しがらみから解放され自由に自己を描かせ、本来のあるべき自己を想像し、その自己像に向けて、飛翔し、苦境から脱出するエネルギーを解放させていった。ウェスレーの主張したこの自由こそ、メソジズムの教育力の源泉となった

メソジズム運動の研究者であるウォーナーは、18、19世紀メソジズムの成功は、会員の人格的性格の変革による個人の社会復帰であるが、宗教的共同体の相互扶助による連帯とその構成員の教育による責任ある性格形成であり、産業革命期の混乱の中で社会秩序の回復による個人の活性化であったと考察している²⁷。

ウェスレーは、メソジストの会員の生涯教育を図り、啓蒙し、活躍の場を与えた、すばらしい教育者であった。18世紀メソジズムでは、女性が圧倒的に多く、女性が生き生きと活躍していたことが、その活力の源のひとつであった。そして女性が、男性と平等に役割、責任、仕事が与えられ、敬意を表されたことにあるだろう。そして何よりもウェスレーが彼女たちを教育し啓発していったことにある。

付記 本稿は小生が今までいろいろな機会に発表してきた原稿より、要約、引用、抜粋しJ・ウェスレーの教育論の視点からまとめ再構成したものである。

(共愛学園前橋国際大学准教授)

²⁷ W. J. Warner, *The Wesleyan Movement in the Industrial Revolution* (New York : Russell & Russell, 1967) , pp. 275-80.